

農村の快適環境整備

—豊かな農村生活のデザイン—



ロールペールのある景観

北海道網走支庁

農業振興部農務課

荒川裕生

1 農村環境の変貌

農村は、いうまでもなく「農業生産が営まれる場」です。このため、農業生産の形が変わるにつれて農村の環境も変貌を遂げてきました。

我が国の伝統的な農村風景を考えると、平野部では水田が広がり、用水が利用できる箇所ではかなり標高の高いところでも棚田と呼ばれるような水田が造成されてきました。これらは二千年に及ぶ歴史の中で先人から受け継がれてきたものです。さらに、標高の高い山間部では、縄文時代にも溯ることができる雑穀などの畑作が営まれてきました。農村の集落には薪や炭を採るための林があり、水田に水を送るための小川が流れていました。農家の宅地にはその地方独特の生け垣や屋敷林が植えられていました。このような要素をつなぎ合わせると、日本人の心の底にある「ふるさと」の風景となってくるのです。

しかし、近代化の歴史、特に戦後の経済成長の下では、それまでのゆっくりとした変化から目ま

ぐるしい変化の時代へ突入したために、このような「ふるさと」の風景は著しくその姿を変えざるをえなくなったのです。

北海道では本州とは異なり、狩猟、漁労、採集によって糧を得る親・自然的文化の長い歳月が続いたため、開拓期以前には大木の森が連なる風景が広がっていたことと思われます。その後の開拓によって、森は拓かれ、町ができ、広々とした農地の中に農家が点在する農村の姿が出来上がってきたのです。特に、戦後の食糧増産、大規模経営の創出というプロセスの下では、農地の拡大、圃場整備、道路の舗装化などによって農村の環境・風景が変化してきました。

2 「環境」への関心の高まり

本年2月、網走支庁の主催で行なった「オホーツクの農村・くらしと景観」写真展のサービスサイズの部で一枚の作品が優秀賞を受賞しました。作品は農地の間を縫って蛇行しながら流れる小川をとらえたもので、審査に当たった委員の方から

牧草と園芸・平成4年(1992年)4月号 目次

第40巻第4号(通巻470号)



雪印育成のえだまめ「サヤムスメ」
莢は濃緑・大莢で、収量多く食味に優れる

<input type="checkbox"/> <雪印推奨> 寒地型牧草ラインアップ	表②
■ 農村の快適環境整備—豊かな農村生活のデザイン—	荒川 裕生… 1
■ 高泌乳、高成分乳のためのサイレージ 特に乳酸菌と酵素の添加に注目して	安宅 一夫… 6
<input type="checkbox"/> トウモロコシのヤマセ対策	竹村 和之… 10
■ 東北地域における雑草「イチビ」の防除方法	佐藤 明子… 16
<input type="checkbox"/> 乳牛における混合給与方式 (TMR 給与方式) の 事例報告及び考察	石田 聡一… 20
<input type="checkbox"/> 東北地方における「えだまめ」栽培技術	長根 強… 24
<input type="checkbox"/> 寒地型芝生の利用で冬もグリーンに・オーバーシーディング	表③
<input type="checkbox"/> 色とりどりの花が長期間楽しめる・スノーミックスフラワー	表④

は幼いころの農村の風景を彷彿^{ほうふつ}とさせるというコメントがありました。コンクリートで装工された直線の川が多くなってきた今日、曲がりくねった川の魅力が再認識されつつあります。

最近の「環境」への関心の高まりは地球的規模での環境問題の影響もありますが、このように、従来あった環境・風景が著しく変化したことによって、何か大切なものが失われたという感覚が背景にあると考えられます。ヨーロッパにおいて、環境保全に関する施策が進んでいることについても、かつて産業革命の時代に森が壊滅的な打撃を受けたこと、第二次大戦後の農業近代化の過程で樹林が減少したことなどが大きく影響しているようです。

もう一点、環境への関心の背景には快適な生活環境、生活の質的向上を求めるニーズの高まりが挙げられます。都市部での宅地開発を例にとると、従来は量を確保することが先決だったのが、最近では、ゆとりのある空間、水と緑のある環境、さらには、街並みのデザインの調和などによる住宅のグレードアップが図られています。

3 農村環境を考える視点

環境問題は目的や効果が分かりにくく、そのため、合意が得にくいのが実態です。それでは、どのような視点から農村を考えれば理解を得られやすいでしょうか。

1) 農業の担い手づくり

最近の若い人々は、職業を選択する場合、必ずしも収入の多寡だけでなく、休暇がどのくらい取れるとか、どういうところに住めるとかを判断材料にするそうです。農業の後継者や配偶者の不足という課題を解決するためには、所得がどれだけ確保できるのか、将来に不安を抱かずに営農ができるのかといった基本的な問題は解決する必要がありますが、果たして、それだけで農業という職業を選択し、あるいは農村に住んでくれるでしょうか。

そのためには、「都会に住んでは得られない農村の魅力」を強調していく必要があります。広い敷地のゆったりとした住宅、窓から見える大きな空と絵のような風景、近くを流れるきれいな川

などを整えていくことによって、過密の都会では真似のできない生活空間を確保することが、遠回りのようではあるけれど有効な担い手対策につながると思われます。

2) 農畜産物の商品イメージづくり

これまで北海道の農業は政府管掌作物を低コストで作っていただけたのですが、現在は、より商品性の高い作目を導入することによって集約化を図るとともに、自ら販路を開拓していくことも求められる時代を迎えています。

そのためには、高品質な農畜産物を生産することはもちろんですが、その品物がどういうところで採れたのかということアピールしていく必要があります。

例えば、北海道の牛乳といえば、一面緑の牧場に牛がのんびり草を喰むという風景が商品イメージとなっていますが、実際訪れてみると、牛の尿の染み出している牛舎の周りなどが目につき、幻滅するということも考えられないわけではありません。

3) 農業・農村のファンづくり

都市住民と農業・農村との関係が単に食品を売り買いするというものであれば、外国と比べて割高のものを買わされているというような、これまでの傾向を乗り越えることはできません。

しかし、輪作がつくる美しい畑地の風景や牧歌的な牧場風景、うるおいのある水辺などが農業を通じて守られているということを都市の人々が理解してくれば、農畜産物が高い安いの論議に終止することなく農業を大切に考えるようになり、ひいては、農業・農村の維持・活性化に国費を投入していくことについても納得してくれる力強い応援団ができてくると考えられます。

4 農村環境のとらえ方

以上のような視点に立って、改めて農村の環境を見直そうとするとき、目に映る対象をどのようにとらえればいいのでしょうか。

今、小高い丘の上にある一戸の農家の地先に立って周りの風景を眺めたとします。ここから見える風景を遠近感によって分類すると、近景、中景、遠景と区分することができます。この区分ごとに

農村環境をとらえてみると次のようになります。それぞれのレベルごとに環境改善の主体が異なりますが、市町村などのリーダーシップによる全体調整が必要です。

1) 近景

住宅やD型ハウス、畜舎、サイロなどの施設、庭、屋敷林、宅地周りの農地などが「近景」を構成しています。農家にとって最も身近な要素であり、農業者の生活を象徴するものです。環境を改善する上では、個人の努力が大きな要因となります。

2) 中景

集落レベル程度の農地の広がり、農地に介在する林地など面的要素、農家住宅や農業施設、独立した樹木などの点的要素、さらには、道路、川などの線的要素が「中景」を構成します。集落単位で行われる土地基盤整備、市町村などの行う道路河川整備が環境を決定する大きな要因となります。地域住民の行う美化運動なども環境改善に役立ちます。

3) 遠景

遠くの山並みや地平線まで続く農地と林地の交錯、水平線などが「遠景」を構成します。自然に与えられる要素が強いのですが、市町村の長期的な土地利用に対する考え方、施策が決定要因となります。

5 農村の快適環境づくり

～オホーツクの事例

次に、農村の環境をより快適なものにしていくことをめざした網走支庁管内の取り組み事例をご紹介します。

1) 農村景観写真展

写真が地域の人々の意識を呼び覚ましたという代表的な例としては美瑛町の丘の風景を全国で紹介した写真家前田真三氏が挙げられますが、オホーツクも丘陵、水辺、山並みなどの条件に恵まれた地域です。こうした自然条件を舞台として、これまでは単に農業生産のシーンとしてし



写真1 馬鈴しょの白い花と防風林

かとらえられなかった馬鈴しょの花、麦の色づき、耕地防風林などは風景を形作る要素として新たな価値付けをすることができます(写真1、標題写真)。

このようなオホーツクの農村の風景をとらえた



写真2 生田原町・新野尾さん宅の景観

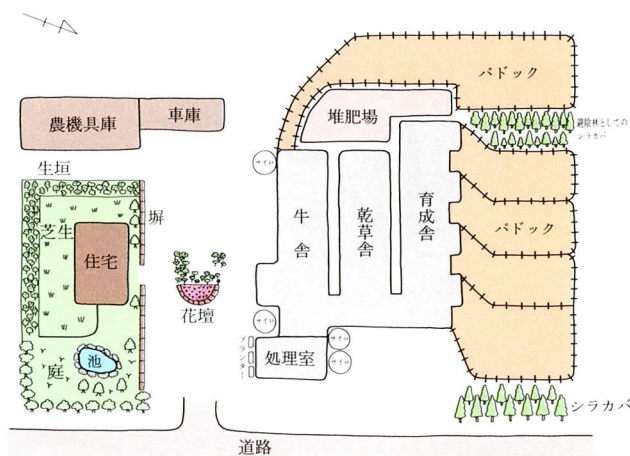


図1 生田原町・新野尾さんの敷地見取図

写真を通じて地域の人々に地域の良さを再認識してもらおうとともに、他の地域へのPRにも役立てようとの趣旨で、網走支庁では平成2年度から始まって2回のコンテストを実施してきましたが、



写真3 女満別町・合田さん宅の赤い屋根



写真4 女満別町・合田さん宅



図2 女満別町・合田さんの敷地見取図

心に訴える優秀な作品が多数寄せられています。

2) 農家の宅地周りの事例調査

本年実施した「オホーツクの農村・くらしと景観」展では、農家の宅地周りの事例調査結果を紹介するパネル展も実施されました。この事例調査は支庁の若手職員が農業改良普及所の協力を得て実施したのですが、宅地全体の色彩の調和を考えているケース、生産施設と住宅の分離に工夫を凝らしている例などがみられましたが、この中からいくつかの事例をご紹介します。

① 宅地の全体構想と色調の調和

生田原町で酪農・畑作の複合経営を営む新野尾さんは施設群の将来像を描きながら自力で施設の塗装に取り組むなど、宅地周り全体の色調の統一を意識しています。パドックの中に白樺の庇陰林を設け修景上の工夫もされています(写真2, 図1)。

② 色彩の統一

女満別町で畑作と肉牛の複合経営を営む合田さんは屋根の色など建物の色彩を統一するとともに、生活と生産の場を生け垣で分離し快適な居住環境づくりを行なっています(写真3, 4, 図2)。

③ ゆとりを感じさせる暮らしの環境

興部町で酪農を営む中沢さんは道路から宅地へのアプローチを白樺並木と手作りの牧柵でデザインしています。また、住宅の庭には家族が憩えるスペースが確保されています(写真5, 6)。

④ 土壌菌を活用した家畜ふん尿処理

小清水町で酪農を営む森田さんは牛の尿を土壌菌を使いながらばっ気することによってアンモニア臭をなくすとともに、処理の結果できる「液肥」を堆肥に添加して熟成を促したり農地に散布するなど物質循環システムを確立し、畜舎環境の改善を図っています(図3)。

6 今後の課題

今後、農村の残された自然環境を守ったり、風景をより美しいものにしていくためには、乗り越えなければならない二つの考え方があると思います。

一つ目は、「経済的に充足しなければ環境には気が回らない」という考え方です。確



写真5 興部町・中沢さんの美しい牧場と白樺並木



写真6 興部町・中沢さん宅の庭

かに農業は次第に厳しい状況になっており、経済面での改善が必要不可欠なのはもっともですが、生活のうるおいや装いに気を配る余裕もない職業に果たして若い人たちが希望を持てるでしょうか。経済と生活を車の両輪ととらえ、できるところから取り組んでいくことが農業の明日を拓いていくことにつながるのではないのでしょうか。

二つ目は、都市の側から発せられがちな「外国のような美しい農村を」という声です。外国と比べた場合、むしろ景観として差が歴然としているのは都市の方です。そこには、街並みづくりに対する市民レベルでの協力の考え方など基本的なところに諸外国との大きな違いが横たわっています。このような背景や農業自体に対する正しい認識など、あくまでも農村に住む人々との相互理解の中から、地域にあった環境を目指していく必要があります。

いずれにしても、地域の人自身が自らの生活環境を快適なものにしていくという認識の下に、先進的な事例に学ぶなどして、住民同士の活発な論議を起こしていくことが豊かな農村生活をデザインしていく上で最も大切であるといえます。

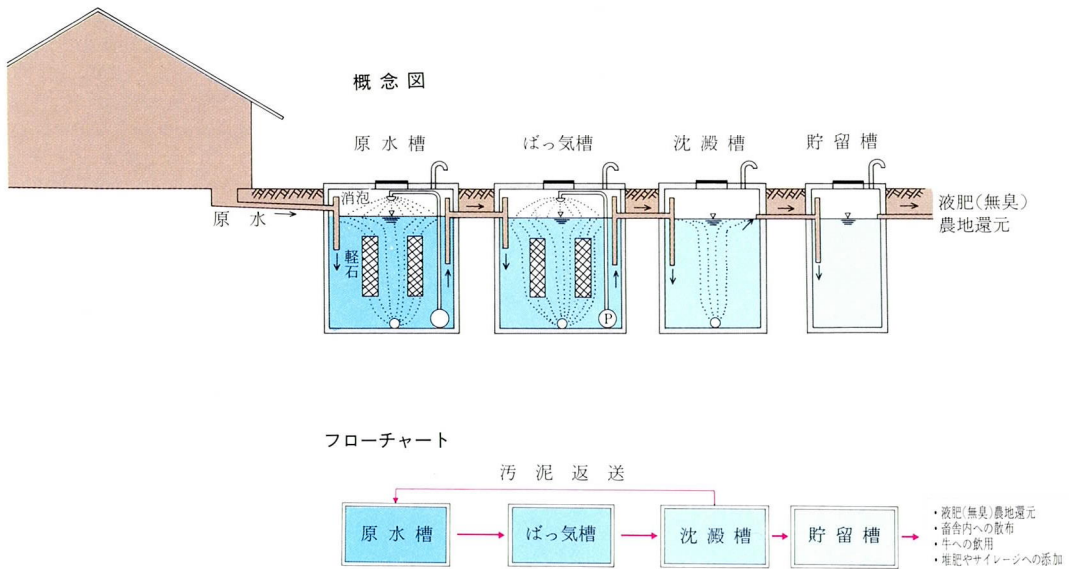


図3 小清水町・森田さんの家畜ふん尿処理